

山下 和華（やました・かずは）長崎大学教育学部附属中学校 1 年  
作品名 命の価値とは  
読んだ作品 『海と毒薬』

「本当にみんなが死んでいく世の中だった。」これは、「海と毒薬」にでてくる言葉です。この本は、第二次世界大戦末期におきた米軍捕虜の生体解剖事件を小説化したものです。私は、学校で配布された「カドブン夏推し」でこの本を知りました。この本を読んでみようと思った理由は二つあります。

一つ目は、ちょうど遠藤周作さんの本に興味をもっていただけからです。私が住む長崎県には海外に遠藤周作文学館があり、今年、生誕百周年の企画展をしています。私は市内に貼られたポスターでそのことを知り、何か遠藤周作さんの本を読んでみようと思っていたところでした。また、紹介文に、「不朽の名作」という表現を見つけ、非常に興味をひかれました。

二つ目は、学校での平和学習を通して、戦争と平和について考える機会が多いからです。長崎は、第二の被爆都市として戦争の悲惨さと、平和の尊さについて世界にむけて発信し続けており、毎年八月九日には平和祈念式典も開催されます。実際の戦争の体験を語る人々や、私の祖父の被爆体験を知ること、戦争の悲惨さについて強く思うものがあるのだと思います。

この本の主人公、勝呂は、戦時中に外国人捕虜の生体解剖事件に関わりました。勝呂は、この事件に関わることを断ることもできたのに、断りませんでした。同僚などから、「断ろうと思えば今からでも断れるんやぜ」「強制しているんじゃない」と言われていたのにも関わらず、直前まで参加していて、実験の直前になって「俺あ駄目だ。浅井さん」「出して下さい。この部屋から」と言いました。しかし、勝呂は、部屋から出ませんでした。後ろから実験の場を傍観しながら、できることなら止めたいと思いつつも何もできませんでした。

なぜ、最初から断らないのか、なぜ、部屋の外に出ないのか、私にはわかりません。わたしがもし勝呂の立場であつたら、断っていたと思います。

わたしは、毎年の平和学習で「命は大切なもの」「命を粗末にはいけない」と習っていたので、このようなことに参加すること自体にはいけないと思ったからです。しかし、この本には、わたしが「命」に対して考えていたことと、全く違う考え方をしている人がたくさんでてきました。例えば、「みんな死んでいく時代やぜ。病院で死なん奴は毎晩、空襲で死ぬんや」と言っている人や、「どうせ助からん患者だろ」といっている人もいました。戦争中は、「命」は失われて当たり前のものであったのだと思います。今は違います。「命」は守られて当たり前のものです。

わたしは、この本を読んで、戦争中と戦後の今では、「命」という同じものに対する認識の違いが、こんなにも大きいということに気づき、おどろきました。しかし、わたしはもっとおどろいたことがあります。それは、この本のなかで、平然と「みんな死んでいく時代やぜ」などと言っていた人が、武器をもっている兵隊や一般の人々ではなく、病院につとめて

いる医者や研究者だということでした。

わたしが知っているお医者さんは、患者さんの病気やけがを治すために、力を尽くしている人たちでした。しかし、この本では、そのような、人の命を助け、救う人々までもが、「命」が毎日消えていくことを当たり前のように考えていました。そして、助けようとするこのほうが不思議という扱いになっていました。

このように、戦争は、失ったら二度ともどらないのは今も昔も変わらないはずの、「命」の価値を軽くし、命を救うべき人の認識までをも変えてしまうような面でも、とても恐ろしいものだと感じました。わたしは、この本を読んで、戦争は、関わった全員が、幸せにはならない、存在すべきではないのだと感じました。